

NIFREL におけるミニカバの母子関係と子移動後の母の行動変化

向井 優希

【序論】近年の動物園は、絶滅の危機にある動物の繁殖に力を入れている。そういった動物の母子関係について研究を進めることで、動物園の種の保存の取り組みに貢献することが出来る。2019年2月21日、大阪府吹田市の動物展示施設「生きているミュージアム NIFREL」で、絶滅の危機に瀕しているほ乳類であるミニカバ(*Choeropsis liberiensis*)のオス(タムタム)が誕生した。カバ(*Hippopotamus amphibius*)の母子関係は他の有蹄類と比べて強固であることが知られているが、ミニカバの母子についての研究はない。そこで本研究では、生後5カ月からタムタムが他の動物展示施設へ移動となる生後17カ月までミニカバの母子を観察し、2頭の関係性を明らかにすることを目的とした。

【方法】2019年7月11日～2020年9月30日まで、個体追跡サンプリング法を用いてミニカバの母子を観察した。1分ごとの瞬間サンプリング法を用いて近接状態の有無や水と陸どちらにいたかなどを、全生起法を用いて approach や leaveなどを記録した。観察時間の総計は193時間20分であった。2019年7月11日～12月23日までは著者を含む比較行動学研究分野の学生5名で観察を行い、2020年1月6日～3月27日までは著者1名が直接観察を行った。その後の新型コロナウイルス感染症の流行を受け、直接観察は取りやめたが、ミニカバの展示施設に設置されている固定カメラ映像の提供を受けて2020年3月18日～9月30日までビデオによる観察を行った。2020年7月14日にタムタムが別の動物展示施設に移動した後も、母カバ(フルフル)の行動変化を記録するために観察は継続された。

【結果と考察】有蹄類の母子関係には「追従型」と「置き去り型」の2種類がある。追従型の動物の子は、母に近い場所で生活する。置き去り型の動物の子は、少なくとも発達初期において、母から離れ、草木の中で隠れて生活する。本研究で観察したミニカバ母子の近接率(母子が母の1頭胴長以内にいたポイント数)は、4～6カ月齢時まで75%以上、7～14カ月齢時は60%前後、15～16カ月齢時は75%以上となっており、観察期間を通して、顕著な追従型の傾向を示した。タムタムの水の中にいた割合と母子の近接率の間には弱い正の相関があった。水中で母子の近接率が高くなるのはカバと同様(倉, 2018)であるが、その理由は不明であった。6カ月齢以降、展示施設のプールの水位が上昇しており、7～14カ月齢時にはそれに伴ってタムタムが水の中にいる割合も減少した。水の中にいる時に、フルフルは潜水し、タムタムは水位が浅くなっているプールの階段で休む傾向があった。タムタムは身体が小さく、プールの中央で足をつけて息を継ぐためにフルフルより多くのエネルギーを費やしていると考えられたため、足をつけられる階段の上を好むのだと推察された。授乳については、ブラジルバク(北村, 2009)と同様に、子が授乳をコントロールする傾向が強かった。ミニカバとブラジルバクの共通点は母が横向きで授乳を行うことであった。

タムタム移動後の1カ月間において、フルフルが水の中にいた割合は増加し、採食率は減少した。倉(2018)が観察した子カバにおいても母カバから離れた後に水の中にいる割合が増えていたことから、これはカバ類の母子に共通する特徴と言える。フルフルはタムタムのいない状況に不安を覚え、カバ類にとって安全な場所である水中に留まるようになった可能性が高い。採食率の減少は、水中にい続けて陸にあるエサ場に入らなくなったことや授乳機会の消失が影響していると考えられる。移動後の3カ月間を通じて、フルフルが水の中にいた割合は次第に減少し、採食率は上昇していった。タムタムのいない状況が、フルフルに影響を与えたことは間違いないが、フルフルの行動は少しずつ移動前のものに戻りつつあると考えられた。(比較行動学)